

夏の川での思い出

森下 翔子

私はこの夏休み、栃木県のやなという川に行きました。小さい頃に川へ行ったことはあったけれど、小学生になってからは行けていなかった。たので久しぶりでした。川に近づくと、海やプールとは違う、独特のにおいが風でた。たよ、てきました。入口付近にはきれいな川にしが住まないうめを焼いて食べることで、さるいりもあり、夏休みということもある。

のかにきゅ、ていました。残念ながら私が行ったときにはつかまえることはできなかった。けれど、川遊びが目的なのでいいかなと思いましたが、川の流しは激しく、足をとられそうになりました。水着を着用して遊ぶ子も多数いました。私は水着を持っていかず、たので、足だけ入りました。冷たくすずむことができました。その後、存分に川遊びをし、入口付近にも記念に川の写真をとりました。すると、

写真をとっている側で水きりをしている人がいたの、私と兄でどちらがより多く水をきれるのか対戦しました。夢中で石を選ぶ、水きりをしていると近くにいた人が水きりのこつなどを教えてくれました。私は人との交流の場として川もその一つであるということを知りました。教えてくれた人のアドバイスもふまえて水きりをしてみると、先ほどよりも多く水をきることができました。私はもちろん、教えてくれた人もおおいに喜んでくれました。

ました。兄も私も何度か練習をかさね、結果は兄の勝ちでした。川でたくさん遊んでいると、時間がたつのが間の出来事かのよう、に早くおとろきました。空を見るともう日が暮れかけていました。その夕日が川にうつし出される姿は何とも神秘的で、心奪われました。川にうつる夕日の姿は、いつもなれないほどでした。私はこの日、改ためて、川があることを、そして人との交流、思い出し、切工と実感しました。

